

欧州研修をおえて

安東大隆

国文学科としては最初の試みであるが、「比較文学」(含海外研修)ヨーロッパへの研修旅行を実施した。以下その経緯を略述する。

国文学という場合、当然日本の文学又は文学作品を考察したり研究したりするものである。しかし、その作品も日本固有のものとして純然と存在しているということではなく、外国文化の影響下にあるものが多い。古くは、白氏文集・文選等の中古文学への影響をはじめ、中国・印度の思想・作品、下って近代では、近代詩における西欧の詩の影響等、枚挙にいとまがない。極論すると、影響やその影(陰)を感じさせないものはないと言ってもいい程である。

又、その外国の各々の作品や思想は、その国の特徴(外的・内的)のもとに具現化されたものである。従ってそれらの作品や思想を理解する一助として、その国を実際に訪問することが必要であろうと思う。

このような意図のもとに今回の特殊研究の現地研修は、計画・実施された。国文学とヨーロッパ(イギリス・フランス・イタリア)とは一見なじみやすいように思われるが、近代文学を考えると、深いかかわりのあることは自明と思う。四月から講義の中で前記三国についての文化や文学などについて、班別に攻究を深め、同時に旅行への具体的準備をすすめた。

実施は六月二十八日から七月七日であった。早朝大学前をバスで出発し、福岡空港へ、更に関西空港から、英国航空でイギリスへ行った。ついでローマ・パリの順に巡回見学をした。

学生の殆どは、はじめての外国への旅行ということもあり、新鮮な感動を受けたようであり、いろいろな点で有意義であった。これらのささやかな経験を基礎としながら、広い視野を持ったバランス感覚のある人へと育ててほしいと思う。今後共、同様の企画を積極的に実施したいものである。以下に学生の感激そのままのレポートを掲載して、その成果の一端としたい。



◆イギリス編

石川 裕恵 (三年)
平田 智子 (三年)

まず、イギリスの概要を簡単に紹介すると、日本とイギリスの時差は9時間、緯度は日本の北海道よりも北。夏の平均気温は18度前後で、少し肌寒い感じがするので、長袖の服が必要。また、年間を通して雨が多い。夏の日照時間は長く、夜9時頃まで明るい。

通貨については、単位はポンドとペンスで、1ポンドは約120〜130円、1ポンド＝100ペンスであった。

次に、テムズ川散策等について紹介する。

私たちの泊まったホテルのすぐそばを、テムズ川が流れる。テムズ川にかかるウエストミンスター橋のそばには、国会議事堂やビッグベンが建っている。現在の国会議事堂は、火災や第2次世界大戦で焼失したため、3代目。ビッグベンは、約92メートルもの高さの時計台で、117年間も動き続けている。鐘が、15分毎に鳴り響く。その音色に、思わず足を止めて見あげてしまった。

官庁街の中程にあるホースガーズには、騎馬部隊がいた。ずっと同じ態勢なので、さすがに疲れるのだろう。眠りについていた兵士がいたらしい。(が、ガイドブックには「任務中は

微動だにしない兵士」と書かれてあった)

世界で最も美しいキリスト教の礼拝堂と言われる「ウエストミンスター寺院」の姿も見られる。白い建物で、2基の尖塔が美しかった。

トラファルガー広場は「人々の憩いの場」という雰囲気、たくさんの方が集まっていた。広場の中心部には、ナポレオンの海軍を撃破したネルソンという人の記念碑が立っていて、その下には、大きなライオンの像が4体ある。子供たちが、そのライオンに乗っていたので、私たちも挑戦したが、乗ることができず、悔しい思いをした。

夜、地下鉄に乗ってタワーブリッジへ行った。暗くなった頃行ったのだが、ライトアップされていて、すごくきれいだった。今では日に1・2度だが、大きな船が橋の下を通る時には、橋桁が開閉される。タワーブリッジは、ビッグベンと並び、ロンドンのシンボルである。

タワーブリッジの近くには、ロンドン塔があった。

行きは地下鉄を利用したので、帰りは、イギリスならではの赤い2階建バスに乗って帰った。高いところから街を眺めることができるし、他の車を見下ろすことができるので、優越感にひたる事ができた。ただ、注意してほしいのは、乗り降りのためのバスの停止時間が短いので、すばやい行動が大切。

街を歩いていると、赤い電話ボックスに出会う。かわいいし、イギリスという感じがした。

バックingham宮殿は、CMでもおなじみとなったが、私たちは行かなかった。衛兵交代式を見に行った友人に写真を見せてもらった。赤い服に黒い帽子の兵隊さんの姿がいっぱい、かわいかった。

買い物についてだが、場所確認などの下調べを、ちゃんとしておいた方がよい。私たちは、適当にぶらぶらして、2度程、道に迷う運命となった。

もし、道に迷ったら、その辺の人に英語で積極的に話しかけてみると良いだろう。きつと、親切に教えてくれるはず。英会話の勉強にもなる。

次に、博物館についてだが、イギリスでは、ほとんどの博物館や美術館が無料であった。私たちは、大英博物館とナショナルギャラリーを見学したが、両方とも無料で「とても充実しているのに」という思いであった。

大英博物館は、パリのルーブル美術館と並ぶ、世界最大の博物館である。膨大なコレクションには圧倒された。ミイラ、彫刻などから、楽譜や原稿などまで、見るものはつきなかつた。

ナショナル・ギャラリーは、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロらの名作を、一同に展示してある。見覚えのある絵画も多数ある。時間がなくて全部を見てまわることはできなかったが、それでも充分、満足できた。

この両者に共通することは、貴重なものであるにも拘らず、すべての人にオープンな形で展示してあるので、自由に見学

ができること。美術的・歴史的価値の高いものも、簡単に見ることができると。また、スペースが広くとってあるので、ゆっくりと鑑賞することができる。展示品をとて身近に感じることができると。また、写真撮影が可能なことには驚いた。日本ではとても考えられない。生活の中に芸術が馴染んでいる表れなのだろう。

次に、オックスフォードだが、ここはまさに「学生の街」であった。中世の町並、その広さ、雰囲気は、他に例えようのないものであった。35の大学が存在するため、広さはもちろんであるが、建物の一つ一つが素晴らしかった。図書館・ホール・礼拝堂、どれをとっても芸術的であり、美しかった。それらの一つ一つが、この落ちついた雰囲気醸し出しているのであらうと感じた。

あいにく日曜日で、学生の姿を見かけなかったのが残念だった。

オックスフォードから、田舎という一言で言うにはもったいない程の田園風景やラベンダー畑が広がるなかを通って、ストラットフォード・アポン・エイボンへ行った。ここは、英国の劇作家として知られる、ウィリアム・シェークスピアの生家があるところだ。

シェークスピアが活躍したロンドンには、何も残っていないが、ストラットフォードには、生家をはじめ、少年時代に通った学校や晩年暮らした家の庭園、墓所のある教会等、ゆかりの建物が残っている。

家は、16Cと17Cに建てられたチューダー様式といわれる白壁に、黒い木組の建築様式で、庭は、多くの花に色どられてきれいだっただ。

シェークスピアの生家は、今は、シェークスピアセンターという名の小さな博物館になっている。生家には、彼の使っていたベッドや家具、直筆の原稿などがおかれていた。

彼の生家から、20と30分程行ったところに、彼の妻であるアン・ハサウェイの家がある。

シェークスピアは、結婚前、よくアンの家へ通っていたらしい。そして、近くにあるエイボン川周辺を散歩していたそうだ。散歩するには丁度よいところだと思った。

最後に、ホテルについてだが、部屋に入ると、カーテンとベッドカバーの模様がおなじだったのには、イギリス人のおしやれを感じた。

食事は、ゆっくりと落ち着いた雰囲気であることができた。ある時などは、ウェイターの名前あてゲームをして盛り上がり、楽しいひとときを過ごすことができた。

私たちの苦労話としてあげておくと、「ミュージカルを見に行きたい」と思っていた私たちは、チケット取りのため、ホテルの方に話しかけてみることにした。英会話の本を片手にたどりと話す。言いたいことが、なかなか伝わらない。結局、先生まで巻き込む事態となった。最終的には、言いたいことは伝わり、ホテルの方の言っていることもなんとかわかった。チケットはというと、売り切れで手に入れることができ

なかった。

外国語を話す第一歩めは、すごく勇気がいると思う。でも、その勇気は大切だと思う。言いたいことはうまく言えなくても、相手の人も、理解しようと努力してくれる。そんな国境を越えた、人の暖かさを実感することができたような気がする。このように、私たちは、イギリスで様々な体験をしたが、総合して感じたことは、イギリスは街全体が絵になると思った。治安も悪くないので、安心して旅を楽しむことができた。

◆ フランス編

近藤 文(三年)
三木 紫(三年)

フランスに到着してまず驚いたのは、空港でした。透明の屋根がついたエレベーターで移動して行くのですが、自分がまるで、チューブの中を通るカプセルになった様な、未来都市に居る様な、不思議な気分になりました。

一日目のパリ市内観光で、最初に行ったのはノートルダム寺院でした。でも、残念なことに、工事中でディズニー映画の最新作「ノートルダムの鐘」での空高くそびえる塔の姿は、見ることができませんでした。しかし、中に入ると、ステンドグラスで作られた美しいばら窓があり、そこから差し込む

光が、蔽そかな雰囲気をより一層、引き立てていました。

次に訪れたエッフェル塔は、パリのシンボルとしてお馴染みですが、本物は想像していたよりも大きく、そびえ立っています。この時は、夏だったので、秋冬物の雑誌の撮影が行われていて、金髪の細くて美しいモデル達に思わず見とれてしまいました。私達は、気さくな警官と写真を撮ったりしました。

凱旋門は通過しただけですが、凱旋門に向かう道が並木道になっていて、大変素晴らしかったです。

パリは、街並も行きかう人々も、みんなお洒落で、赤い屋根のカフェがたくさんあってかわいかったです。

この日のランチは、カフェレストランで、店の外観だけでなく、料理もおいしかったし、ウエイトレスのお姉さんもとてもかわいくて、花マルのお店でした。ウエイトレスのお姉さんがあまりにかわいいので、一緒に写真を撮ってもらいました。

午後は、二つの美術館へ行きました。オランジェリ美術館とルーブル美術館です。オランジェリ美術館はとても小さい美術館でしたが、ルノアールやピカソ等の有名画家の絵が多く展示されています。しかし、何よりもこの美術館の目玉はモネの蓮の絵です。教科書等に出ていて有名ですが、とにかく大きくて驚きました。二部屋分の壁程の大きさがあるのですが、あの絵がこれ程大きいという事を初めて知りました。

ルーブルは、とにかく広いです。広いと言うより他の言葉

がでてこない位広いです。その広さと収蔵品の多さを説明すると、一つの作品を一秒で観たとして、全て観てしまうのに一か月かかるという事です。単純に計算しても、その凄さが分かると思います。私達のグループは、有名な作品だけを選んで観ることにして、地図を頼りに一生懸命探して、歩いて、モナ・リザ、ミロのビーナス、サモトラケのニケ、ナポレオン戴冠式等、数々の著名な作品を観ることができました。驚かされたのは、何より展示の仕方です。日本と違いオープンにされていて、ロープが簡単に置いてある位です。そのロープさえもない所があり、本物の空気に親しむことができます。日本では、とても考えられないことだと思っています。

私が個人的に嬉しかったのは、ミロのビーナスの背中を覗かれたことで、最も魅かれた作品は、天を仰ぐように立つ神々しい姿のニケ像でした。

美術品ではないのですが、ルーブル美術館の前の公園で、移動遊園地を見ました。あまりに立派な遊園地で、大きな観覧車もあり、日本に帰って友達に写真を見せてもなかなか信じてもらえませんでした。

市内観光が終わると、いよいよ次の日は自由行動です。研修旅行を買い物ツアーと勘違いしていたので、ワクワクしながら出掛けました。しかしその反面、不安もありました。海外旅行の際、一番心配なのが言葉の面だと思えます。特にフランス人は、誇り高く、英語で話しかけてもフランス語で返事をすると聞いていたので、海外旅行で使う会話を練習した

位です。でも、いざフランス人を前にすると、緊張して何の言葉もでてきません。最後に「メルシー」と言うのが、私の精一杯でした。うれしい事に、相手も笑って「メルシー」と言ってくれるので、とても気持ち良く買い物ができ、とても気持ち良くお金を使いました。当たり前のことなのですが、どこの国へ行っても、スマイルとあいさつは心を和ませてくれるとしみじみ感じました。私の使ったフランス語は「メルシー」だけでしたが、気持ちの良い時間を過ごせたので、合格点をあげています。それから、フランスでは英語が通じないということでしたが、通じます。道に迷った時、両替商に英語で尋ねたところ、とても親切に教えてくれました。

日本にある同じブティックでも、あの街並の中に在るだけで、全く違った様に見えるから不思議です。とても高くて手が出ない商品でも、まるで自分の物になった様な気さえしてきます。しかし、一歩お店の中に入ると日本人ばかりで、なんととも言えない気分になりました。

買い物に満足すると、お腹が減ってきます。カフェに行きたい気もしましたが、メニューが読めそうにないので、マクドナルドへ行きました。外国のファーストフードのサイズが大きいことは知っていましたが、自分の買った物を見て驚きました。更に、一緒に行った友達が約一リットルのジュースのバックを持って出てきた時の顔は、今でも忘れられません。慣れない土地での買い物は、ドキドキの連続でしたが、お腹もいっぱいになったし、欲しい物も手にとってとても満足

しています。ただ、私達は最後の最後になって失敗をしてしまいました。フランスの空港で、チェックアウトの手続きをしていなかった事に気付いたのです。ホテルのカードキーがポケットに入っていたので気付きました。まだ請求書は届いていません。そして、そのカードキーは机の中にあります。最後に、これから海外旅行に行く時はもっと予習をしてから出掛けたいと思います。皆さんが出掛ける時には、履き慣れた靴で行くことをお勧めします。全てにおいて、日本と規模が違います。

◆イタリア編

篠崎 竜也 (二年)

日本を発つ前、僕の持っていたイタリアのイメージは、貧相な知識と豊富な偏見の産物と言えるものだった。女性にだけ優しい伊達男と、やたら陽気なオバチャンが(若い女性はいないのだろうか?)、ピザを食べながら、コロッセオをバックに、ローマの市内をアルファ Romeo で爆走する。これがイタリアに対して考えた最初のイメージだったのだ。

イタリアで最初に我々を迎えてくれたのはコシヒカリのイタリア版、イタヒカリだった(そのまんま過ぎて洒落にもならん)。ぬるいローマの夜風を体感じつつ、僕は「これは

手強い相手になりそうだ。」とイタリア米をかみしめていた。イタリアと言うと、かなり陽気な（と言うよりアバウトな）人達を想像すると思う。

実際その通りだったのである。

市内観光中、道路の補修工事の場面にでくわしたが、なんと作業員の面々は、路上でコンクリートを練っていたのである。工事関係のアルバイトの際、タブーとされていたことを、イタリア人はおおっぴらにやっていたのである。CD店でもそうだった。僕は何のマチガイか、英・伊の二国でCDの万引き犯と疑われた。おそらく、手続き不良の為の事故だと思ふのだが、出入口の盗難防止システムにつかまったのだ。無論、どちらの場合も支払いは済ませている。

イギリスの某大手CD店の場合、大男が二人やって来て、簡単なボディチェックとバッグの検査を受けた。イタリアでやられた時は、店員に「どうしよう?」という視線を送ると、「行っいいいよ。」と手を振っただけであった。仲々、イメージ通りの人達である。そして、イタリア人の決定版とも言ふような女性には空港で出会った。

待合わせの間、タバコを吸おうと思ったが、辺りが禁煙なので、案内所で、どこで吸えばいいのか聞いてみた。すると、その女性は、「気にする人がいなかったら、ドコでも良いのよ。」

と、机の下から火のついたタバコを取り出しウィンクしてみせた。彼女も吸っていたのである。

以上の様な実例から（すべて実話である）、「おおらか」というイタリア的思考はウソではないという確信を得ることができた。さて、もう一つ。

イタリアという国はまた、至る所で歴史というヤツを感じることがができる。ローマの成立は紀元前七五三年というから、当然と言えば当然だろう。例えばコロッセオの中の石、僕が座った石は、かつて、剣闘に歓声をあげていた古代ローマ人が座ったそれかもしれないし、何気なく歩いた道は、ネロやユリウス・カエサルも歩いた道かもしれないのだ。

名所・旧跡地では「くの散歩道」というのがよくあるが、ここではそんなことをしなくても、市内すべてがそうだったのだ。奥が深い。

わずか、三日程ではあったが、イタリア滞在中、僕は多くの人々と会い、話をする事ができた。お釣りをそのままチップとして（全額!!）もらう、テリー・サバラスの様なタクシー運転手や、テルミニ駅近くのカフェでメニューを一つ一つ教えてくれた親切なおじさん（その関係者ではないようだった）。たまたま入ったピザ屋で、「それは美味しくない。この店で食うならコッチだ。」とナマリのキツイ英語でアドバイスをくれたミラノのサラリーマンなど、面白い人達ばかりであった。今度行くとしたら、僕は彼等にもう一度会いたい。

Grazie/Italy!!

Mi sono divertito!!

（とても楽しかったです。ありがとうございます。イタリア!!）